

平成22年度 刈谷城跡発掘調査現地説明会

平成22年12月25日(土)午前10時～
刈谷市
刈谷市教育委員会

1 刈谷城について

刈谷城は天文2年(1533)に水野氏が金ヶ小路のほとりに築城した。もとの刈谷城は当地より約1.2km南東にあったが手狭になったという理由で移転・新築した。新しく刈谷城が移ったことにより、それまでの城があったところを元刈谷と呼ぶようになった。江戸時代になって、水野勝成を初代藩主として、9家22人の藩主によって治められた。

江戸時代中期までの城絵図には、北西と南東の隅に2層の櫓があったことが確認できる。南東の櫓の両側には石垣があり、その上に多聞櫓が続き、表門・裏門へと続いている。(図1)

明治4年の廃藩置県後、刈谷城は政府の所有となり、城郭建築は入札によって払い下げが行われ取り壊された。その後は大正2年に大野介蔵に売却され、保存されたことを経て昭和11年に町に売り渡され、翌年には亀城公園となった。

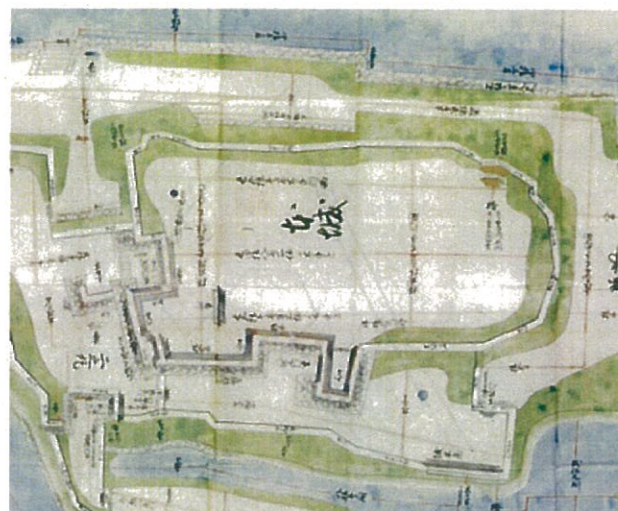


図1 刈谷城絵図(本丸部分 江戸中期)

2 調査の目的と経緯について

今回の発掘調査も前年度と同様に亀城公園再整備事業に基づくものである。今年度の調査の目的は、前年度の調査で検出した礎石跡をはじめとする遺構について、調査範囲を面的に拡大してそれらの広がりや配置、帰属時期等について確認することである。

調査区は本丸部分に4か所、腰郭部分に1か所の計5か所を設定し、平成22年11月下旬から順次調査を開始した(図2)。調査面積は合計で380㎡である。12月末現在(現地説明会まで)、本丸の4つの調査区(A～D区)の遺構検出・調査をほぼ終了している。腰郭の調査区(E区)については、年明けに実施する計画である。

なお、各調査区の調査目的は以下のとおりである。

- A区…本丸の表門に関わる遺構の検出と配置の確認を目的とする。前年度調査では表門に関わる建物の礎石の可能性のある礎石跡を1基検出しているため、範囲を広げて調査する。
- B区…本丸の石垣築造に関わる当時の痕跡を確認することを目的とする。前年度調査では後世の大規模な解体により石垣・裏込め石・根石のいずれも検出されなかったため、今年度は本丸斜面も発掘調査する。
- C区…本丸の石垣および多聞櫓に関わる遺構の検出と配置の確認を目的とする。前年度調査では、溝状に掘った中に多量の栗石を入れて地盤を固めたような遺構の一部を検出しているため範囲を広げて調査する。
- D区…本丸の裏門および多聞櫓に関わる遺構の検出と配置の確認を目的とする。前年度調査では裏門に関わる建物の栗石の可能性のある建物基礎跡を3基検出しているため、範囲を広げて調査する。
- E区…腰郭に張り出す本丸石垣の築造に関わる遺構および腰郭の地盤固めに関わる遺構の検出と配置の確認を目的とする。前年度調査では、細い溝の中に人頭大の石が入れられた遺構の一部と、多量の栗石を入れて地盤を固めたような遺構の一部を検出しているため、範囲を広げて調査する。

3 調査成果の概要

A区…A区では、南北方向に並ぶ礎石跡を6基確認した。確認した礎石跡の配置は、東側に4基、西側に2基で、西側の礎石列は北側から1列目と3列目のみを確認した。隣り合う柱の間隔は約2m(6尺5寸)となっている。この2列の礎石列の両側には方向を同じくして溝跡を確認することができた。

東側の礎石列と溝跡の間隔は約1.65m(5尺)、西側の礎石列と溝跡の間隔は約2.5m(7尺5寸)となっており、西側が広がっている。これらの遺構の位置は絵図と比較すると、表門の位置に相当することから、確認した礎石跡と溝跡は、表門の礎石跡と表門の屋根から落ちる雨水をうける雨落ち溝である可能性が考えられる。しかし、東側の礎石列が等間隔に並んでいて入口にあたる間隔の広い部分が確認できないことや、現状で絵図に記載されている東西2間2尺(約4.2m)、南北4間2尺(約7.8m)の規模が確認できないなど不明な点もある。また、廃城後のものかもしれないが、調査区北東部で瓦だまりが確認され、土井家家紋入り軒丸瓦などが出土した。その他、時期・性格不明の石敷遺構も検出された。

B区…B区では地固めと思われる遺構を確認した。北東-南西方向を向いており中央には溝状の掘り込みに拳大の川原石が多く詰められている状況を確認できる。

C区…C区では、B区で確認した地固めと思われる遺構が北東方向へと伸びている状況を確認した。昨年度の確認調査の際に断面を確認したところ、深さは1m以上あることから地固めをする際に大きく溝状に掘り込んで拳大の川原石と土を混在させて溝を埋めて造られていることが分かる。これには礎石跡の根固め石と同様な効果があったと思われる。また、この遺構は調査区の北端付近で北西方向に曲がっており、この屈曲部は絵図と比較すると多聞櫓の屈曲部に相当する可能性がある。

D区…D区でも、B・C区と同様に地固めと思われる遺構を確認した。D区では2列の地固め遺構を確認しており、本丸の内側と外側に相当するものである可能性がある。地固め遺構の構造は、西側が約30cm、東側が1m以上と深さが大きく異なっている。また、調査区の北東部で北西-南東方向に並ぶ3基の礎石跡を確認している。これは昨年度の調査ですでに確認していたものであるが、今回の調査で確認した地固め遺構が仮に多聞櫓に伴うものであるとすれば、これらの礎石跡は絵図と照らし合わせると裏門の基礎の一部である可能性がある。

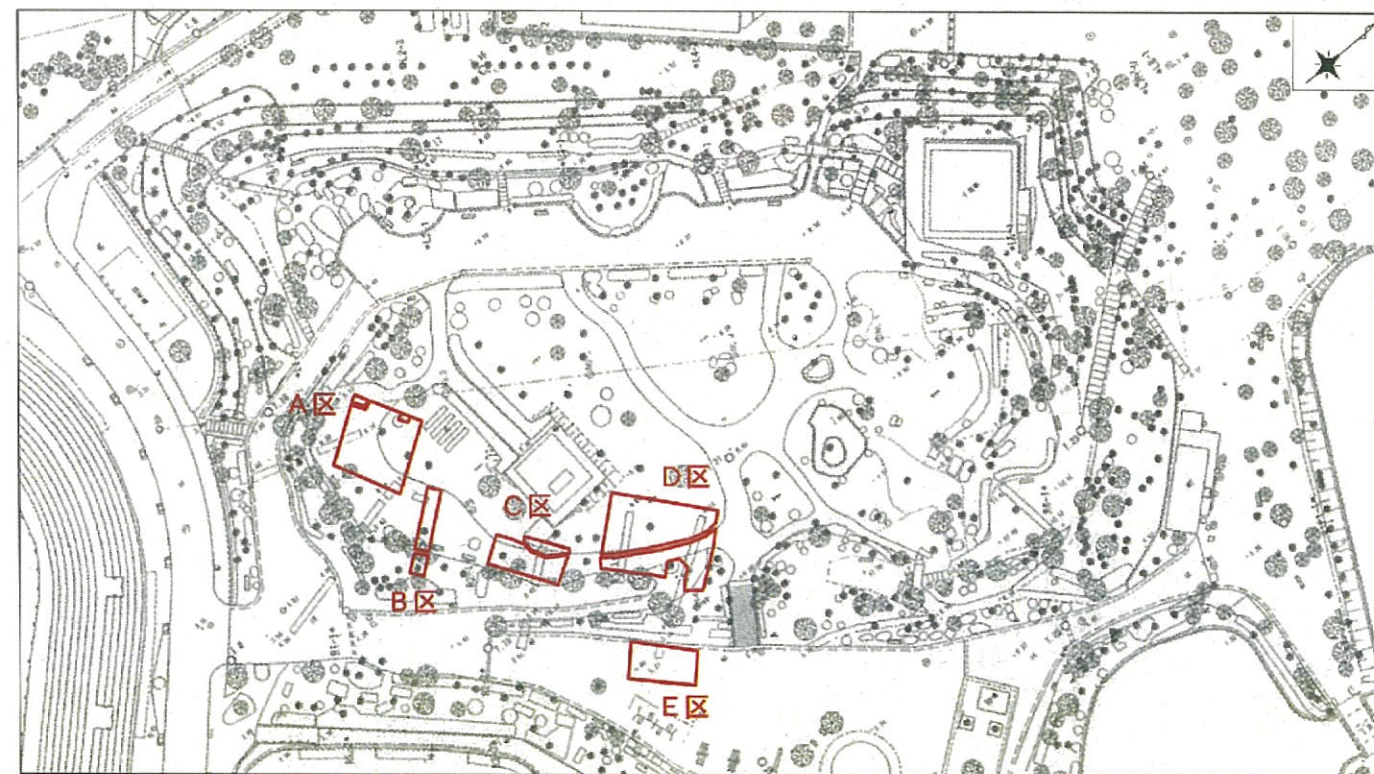


図2 各調査区位置図

調査区図面



① A区 礎石跡



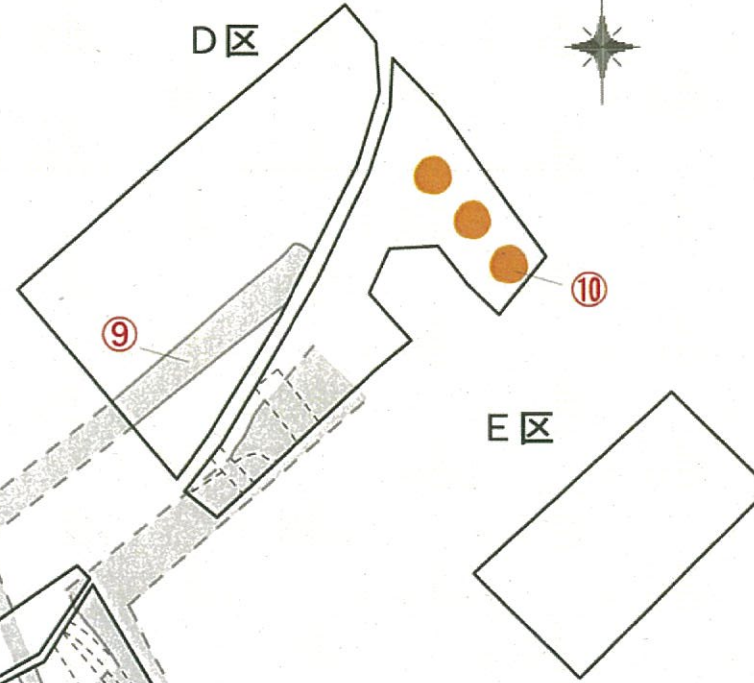
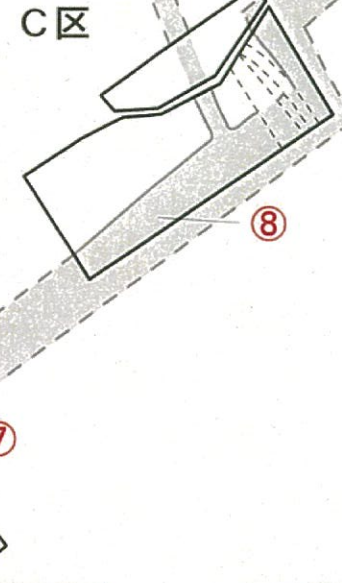
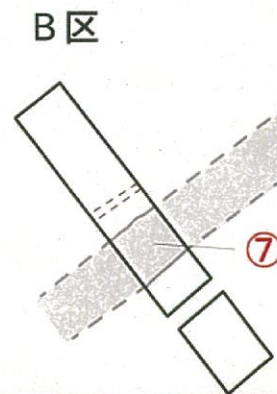
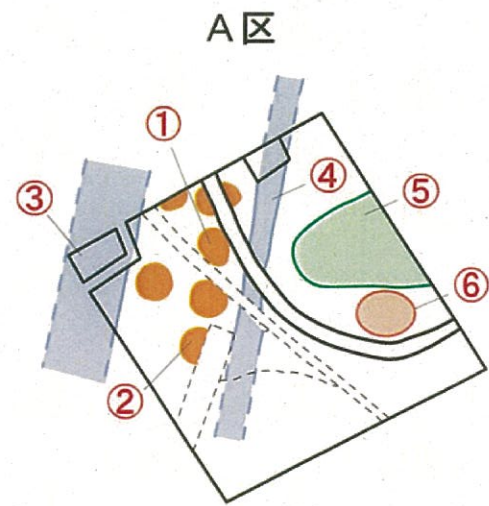
④ A区 雨落ち溝



② A区 礎石跡



⑤ A区 瓦だまり



凡例

● 礎石跡	● 瓦だまり
■ 雨落ち溝	● 石敷
■ 地固め遺構	

0 S=1/250 10m



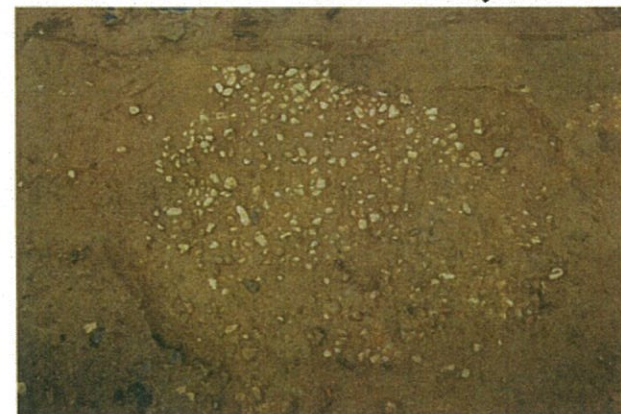
⑧ C区 地固め遺構



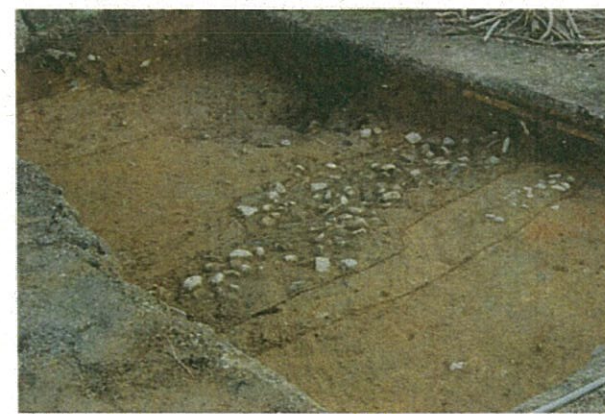
⑨ D区 地固め遺構



③ A区 雨落ち溝?



⑥ A区 石敷遺構?



⑦ B区 地固め遺構



⑩ D区 礎石跡